

不撓不屈

地域とともに
本所消防署の百年

目次

発刊の辞

第一章 祝辞

第二章 百年の歩み

開署から現在までの沿革・年表

第三章 歴代消防署長・消防団長一覧

第四章 令和八年の本所消防署

消防署員・消防団員・消防少年団員一覧

第五章 次の百年に向けて

若手職員の誓い

編集後記

発刊の辞



本所消防署は、本年七月一日、大正十五年の開署から数えて百周年という大きな節目を迎えます。

この記念すべき日に際し、百周年記念誌をここに上梓できますことは、職員一同にとりましてこの上ない喜びであります。本誌の表題に掲げた「不撓不屈（ふとうふくつ）」という言葉には、強い意志を持ち、いかなる困難に直面しても決して屈しないという意味が込められています。顧みれば、当署は大正十五年七月一日に産声を上げて以来、関東大震災からの復興途上にある東京において、住民の命と暮らしを守る重責を担い続けてまいりました。その一世紀に及ぶ歩みは、まさにこの「不撓不屈」の精神を体現する歴史でもありました。

東京大空襲の猛火、高度経済成長期における都市火災の頻発、そして近年の激甚化・複雑化する自然災害。幾多の試練が立ちはだかりましたが、いかなる時も先人たちは、不退転の使命感と卓越した技術、そして地域の皆様との固い絆を糧に、不屈の闘志でそれらを乗り越えてまいりました。

今日の本所消防署があるのは、百年の長きにわたり職務に邁進された歴代署長をはじめ、全職員のたゆまぬ努力の賜物であります。ここに改めて、深甚なる敬意と感謝の意を表するものであります。

また、長年にわたり当署の活動を温かく見守り、ともに歩んでくださった地域の皆様、町会・自治会の方々、本所消防協働団体の皆様に対しましても、心より厚く御礼申し上げます。

本誌は、これまでの百年の歩みを克明に記録し、その精神を次世代へと正しく継承するために編纂いたしました。「温故知新」の言葉通り、過去を振り返ることは、未来を切り拓くための確かな羅針盤となります。本誌を通じて、私たちが受け継いできた「不撓不屈」の重みを感じていただき、地域防災の絆をより一層強固にする一助となれば幸いです。

次の百年もまた、「命を守る」という不変の使命を胸に、地域の皆様とともに歩み続けることをここに誓い、発刊の辞といたします。

令和八年七月一日

東京消防庁本所消防署長 三浦 弘直

第一章

祝辞	市川	博三	(東京消防庁消防総監)
	山本	亨	(墨田区長)
	加藤	雅之	(東京都議会議員)
	成清	梨沙子	(東京都議会議員)
	藤崎	こうき	(東京都議会議員)
	坂井	ユカコ	(墨田区議会議長)
	早川	洋子	(本所消防団長)
	岡本	恵子	(本所消防懇話会長)
	鈴木	明弘	(本所防火管理研究会長)
	老田	勝	(本所災害防止会長)
	飯沼	清	(本所防火防災協会会長)
	佐々木	好子	(本所防火女性の会長)
	伊藤	光政	(本所消防少年団長)

第一章

祝辞	中野 孝雄	(第七消防方面本部長)
	関口 辰三郎	(第36代本所消防署長)
	秋山 恵	(第37代本所消防署長)
	緑川 元康	(第38代本所消防署長)
	小田桐 行雄	(第40代本所消防署長)
	齋藤 和文	(第42代本所消防署長)
	熊澤 利久	(第43代本所消防署長)
	小暮 秀嗣	(第44代本所消防署長)
	宮野 収	(第48代本所消防署長)
	和田 浩知	(第49代本所消防署長)
	瀬尾 弘孝	(第50代本所消防署長)
	葛城 歳男	(第51代本所消防署長)

祝辞 市川 博三（東京消防庁消防総監）



このたび、本所消防署が開署100周年の佳節を迎えられましたことに対し、心からお慶び申し上げます。

本所消防署は、大正15年7月1日に当時の第六消防署から分離・独立して以来、地域の防災機関として、災害対応や火災予防など、多岐にわたる各種施策を積極的に展開し、本所消防団とともに、地域の皆様の安全・安心の確保に努めてまいりました。

これまでに本所消防署を支えていただきました墨田区をはじめとする関係機関、消防協働団体、そして地域の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

その歴史を顧みますと、本所地区は関東大震災と東京大空襲という二度の焦土を経験しました。特に空襲では管内の95%が焼失し、避難誘導や消火にあたった署員19名、警防団員94名が職に殉じ、それ以来、本所消防署では「二度と同じ悲劇を繰り返さない」という固い決意のもと、不屈の精神で地域の安全を守ってまいりました。

今日では、本所地区の東京スカイツリーや両国国技館には、世界中から多くの観光客が訪れ、国際色豊かな街へと変貌を遂げております。多様化する都市環境の中で、言語の壁を越えた防火防災指導や、大規模集客施設における安全確保など、時代の要請に応じた新たな役割を担う本所消防署の存在は、我が身の危険を顧みず、住民の命を守った先人たちの遺志を現代に受け継ぐ、極めて意義深いものと言えるでしょう。

東京消防庁といたしましても、本所消防署を中心に地域の皆様と連携して、地域特性に応じた効果的・効率的な施策を積極的に展開し、誰もが安全で安心して暮らすことのできる「セーフシティ」の実現に向け、全力を挙げて取り組んでまいりますので、変わらぬ御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本所地域の益々のご発展と、皆様方のご健勝、ご多幸を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝辞 山本 亨（墨田区長）



輝かしい歴史と伝統を誇る本所消防署が、この度、開署１００周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

これまで地域住民の生命と財産を守るため、昼夜を分かたず職務に精励されてこられた皆様の御尽力に、深く感謝申し上げます。

本所消防署は警視庁第６消防署から分離独立する形で開設されたと伺っています。前身の第６消防署本所出張所時代には関東大震災を、分離独立した後には東京大空襲で消防庁舎が焼失するなど、激動の時代を乗り越え、今日を築られました。この間の、消防署の皆様のたゆみない情熱と御努力に改めて敬意を表する次第です。

本区は、こうした苦難や悲しみの歴史を多くの先人の方々が共に乗り越えてきたこともあり、地域の皆様の、防火・防災意識もたいへん高い土地柄です。

記憶に新しい新型コロナへの対応においても、消防署をはじめ、医療機関、そして、区民の皆さんが一丸となって、全国に先駆けた取組に大きな力を発揮してくださいました。

一方、近年の異常気象による水害リスクなど、消防の皆様の担う役割は多種多様化するなか、区民の期待も大きく、その重要性は今後もますます高まっていくものと思います。

本区においても、地球温暖化に伴う気候変動等による台風の大型化や局地的豪雨による風水害、また首都直下地震などの災害に強い安全なまちづくりを推進しています。今後も、貴署との連携をさらに強化し、安全・安心な区民生活を確保していきたいと考えていますので、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、開署１００周年を契機に、本所消防署のさらなる御発展と、署長様を中心に署員の皆様のますますの御活躍を御祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝辞 加藤 雅之（東京都議会議員） 1/2



本所消防署がこの度、昭和100年という記念すべき年にめでたく100周年を迎えることになりましたこと、心からお祝いを申し上げます。

この間、署員の皆様におかれましては、日夜献身的に業務を遂行され、1世紀という長きに渡って管内の安全・安心を保ってこられたことに、心から敬意と感謝を申し上げます。

また、署員とともに力を合わせて活動されてきた本所消防団の皆様、そして署を支えてこられた本所消防協働団体の関係者や地域の皆様にも、お祝いと感謝を申し上げます。

私にとりまして本所消防署は、墨田区の北部エリアと比べると、管内である南部エリアは誕生当時と違って区画整理がなされており、相対的に危険度は低いものの、高層ビルやマンションが多く建設されたことから、現在においては、ハンゴ車や空中作業車の存在が欠かせない特殊なエリアを抱えた防火防災の拠点といったイメージです。

また、いろんな方から都のインフラ施設を見学するにはどこがいいかと聞かれますが、その際には必ず同消防署に併設された「本所防災館」は素晴らしいよ、為になるから行ってみてと答えています。

さらに、広い管内をカバーするには本署だけでなく分署である出張所との連携も重要です。その出張所で思い出深いのが本所消防署錦糸町出張所の設置です。同署管内には、古くから緑出張所と東駒形出張所、小梅出張所がありますが、近年老朽化対策が課題となっていました。

祝辞 加藤 雅之（東京都議会議員） 2/2

こうした中、江東橋一丁目にあった都の児童相談所が江東区に移転し、その跡地活用を巡って地域から利便施設の設置などの要望が寄せられていました。また、J R錦糸町駅そばの一等地ということもあって、いろんな利用形態が考えられました。

消防庁は、現在地再整備の困難性や激甚化・頻発化する災害への備え、緊急出動する署員の宿舍設置の必要性を考えると、緑出張所に近いエリアに移転新設が望ましいとの検討がなされました。

一方、署を下支えする地域においては、集会機能等が必須でありその調整が課題でありました。

そこで、消防としての機能を最大限発揮していくためには、地域との協力があつてこそ真価が発揮されるとして、都民相談室や防災教室の設置、出動時サイレンの調整で調和が図られ協力体制が構築されたことは素晴らしいことだと思います。

東駒形出張所も現在地再整備に向けて仮移転が完了し建て替え工事がスタートします。小梅出張所も更新の時期を迎えていくことになりますが、本署を中心に4拠点が連携してこれからも都民の生命・財産を守るために務めていただくよう期待しております。

結びに、本所消防署がこれからまた新たな一步を踏み出し、全国最強の消防組織として輝かしい歴史を築いていかれますよう祈念すると共に、引き続き全力で応援して参ります。ありがとうございました。

祝辞 成清 梨沙子（東京都議会議員）



本所消防署は、100年にわたり墨田区民の暮らしに寄り添い続けてきた存在です。開署100周年という輝かしい節目を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

消防署は、子どもには憧れの、大人には頼もしい、地域になくてはならない存在です。防災フェアや消防車の乗車体験には毎年多くの家族連れが訪れ、私自身も息子や娘と手をつないで参加した1人です。本所防災館にも、町会の皆様と、また家族とで幾度となく訪れ、貴重な経験をさせていただきました。こうした日常の積み重ねが、地域と消防署の深い絆をつくってきたのだと思います。

その一方で、首都直下地震への備え、気候変動による水害リスクの高まりに加え、救急需要のひっ迫など消防行政を取り巻く課題も深刻化しています。老朽化した資機材の更新、ドローンをはじめとするデジタル技術の現場活用、そして増大する救急需要に応えるための人材確保と処遇改善——これらは都議会ですっかりと前進させるべき政策課題として、取り組んでまいります。

次の100年も、本所消防署が区民の誇りであり続けますよう、ともに歩んでまいれたらと存じます。隊員の皆様の日々のご尽力に心から感謝申し上げますとともに、本所消防署のさらなる発展を祈念しております。



祝辞 藤崎 こうき（東京都議会議員）



本所消防署開署100周年、誠におめでとうございます。

大正・昭和・平成・令和と時代が移り変わる中、本所消防署は一世紀にわたり、地域住民の生命と財産を守るため、昼夜を問わず献身的な活動が続けてこられました。

その歴史は、関東大震災や戦災、そして近年の自然災害や都市化の進展など、数々の困難と向き合いながら歩んできた本所地域の歴史そのものでもあります。

私自身、地域活動や議員活動を通じて、消防職員の皆様はもとより、消防団員の皆様が日頃から地域の安全・安心のために尽力されている姿に接し、その責任感と使命感に深い敬意を抱いております。

近年は首都直下地震への備えや激甚化する自然災害への対応など、消防行政に求められる役割はますます大きくなっています。そのような中、本所消防署がこれまで培ってきた経験と伝統を受け継ぎながら、新たな時代の課題に果敢に挑戦し、地域防災の中核としてさらなる発展を遂げられることを期待しております。

100年という輝かしい歴史を築かれた先人の皆様に心より感謝を申し上げるとともに、本所消防署並びに関係する全ての皆様の今後ますますのご活躍とご健勝を祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝辞 坂井 ユカコ（墨田区議会議長）



本所消防署が開署100周年という記念すべき節目を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

100年という歳月の中で、本所消防署は関東大震災からの復興、戦災、高度経済成長、そして東日本大震災をはじめとする数々の災害や事故に向き合いながら、地域住民の生命と財産を守り続けてこられました。まずは歴代署員の皆様、関係者の皆様のご尽力に深く敬意を表します。

私自身、消防団員として、また消防少年団の副団長として活動する中で、本所消防署の皆様には長年にわたり大変お世話になってまいりました。

消防団活動では、火災現場や各種訓練、防災活動を通じて、署員の皆様の高い専門性と責任感到触れてまいりました。また消防少年団活動では、子どもたちに防火・防災の大切さを伝え、地域を愛する心を育てる姿を間近で見えてまいりました。

振り返れば、この15年ほどの間にも、本所消防署は地域とともに歩み続けてこられました。消防署は単に火を消す場所ではありません。地域防災の拠点であり、消防団や地域住民を支える存在であり、未来を担う子どもたちに命の大切さを伝える学びの場でもあります。

近年は自然災害の激甚化、高齢化の進展、外国人居住者や来訪者の増加など、消防行政を取り巻く環境も大きく変化しています。しかし、どのような時代になっても「地域を守る」という使命は変わりません。

本所消防署が100年にわたり培ってこられた技術、経験、そして地域との信頼関係は、本所地域の大きな財産です。次の100年に向けても、本所消防署が地域の安全・安心の象徴として、さらに発展されることを心よりご期待申し上げます。

結びに、これまで本所消防署の発展にご尽力された全ての皆様に感謝と敬意を表しますとともに、本所消防署並びに関係各位のますますのご発展、ご活躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝辞 早川 洋子（本所消防団長）



本所消防署が開署１００年の輝かしい節目を迎えられましたことを、本所消防団員一同、心からお祝い申し上げます。

大正１５年の開署以来、一世紀にわたる歴史の中で、東京大空襲をはじめとする幾多の試練や戦後の混乱、激しさを増す災害を克服し、署員一丸となって区民の生命・財産を守り抜いてこられました歴代署長をはじめとする署員の皆様の不断ご努力に、深い敬意と感謝を表します。

我が本所地域の消防の起源は、江戸時代に八代将軍徳川吉宗が整備を命じた「いろは四十八組」の中の、「本所・深川十六組」にまでさかのぼります。木造家屋が密集する街で、住民自らが街を守るという強い連帯感のもと、纏や鳶職の技術を活かした火消し伝統が、現在の消防団制度の原型となりました。戦後、昭和２２年１２月１日、地域住民により団長以下総員３００名、団本部と四ヶ分団編成を以って「本所消防団」結成・発足されてから、私たちは本所消防署の皆様と

緊密に連携し、常に歩みをともにしてまいりました。

現在、本所消防団は団本部と八ヶ分団で構成され、会社員、自営業、学生など、男女を問わず多様な地域住民が所属し、火災対応や防災訓練、水防活動に奔走しております。近年、首都直下地震の発生や災害の多様化が危惧される中、地域防災力の要として消防団に課せられた責務は極めて重大であると認識しております。

この記念すべき百周年を機に私たちは伝統ある歴史の重みを深く胸に刻み、本所消防署との連携を一層強化し、より安全で安心な本所の街の実現に向けて、地域に愛され信頼される消防団を目指して邁進していく所存であります。

結びに、百周年の輝かしい業績と伝統を礎に、本所消防署の今後の益々のご隆盛と、署員各位のご健勝とご多幸を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝辞 岡本 恵子（本所消防懇話会長）



この度、本所消防署が開署百周年という輝かしい節目を迎えられましたことを、本所消防懇話会を代表いたしまして、心よりお慶び申し上げます。

大正十五年の開署以来、本所消防署は地域の安全・安心を守る拠点として、幾多の困難を乗り越えながら、その歩みを重ねてこられました。とりわけ、昭和二十年三月十日の東京大空襲により、本所地区は甚大な被害を受け、多くの尊い命と、長年にわたり築き上げられてきた街の姿が失われました。私は、祖母が関東大震災、東京大空襲と二度被災しており、子供のころは当時の様子をよく聞かされました。

そうした困難の中にあっても、地域の人々は歩みを止めることなく、消防署をはじめ関係各位と力を合わせ、復興への道を一步ずつ進んでまいりました。灰燼に帰した街は、先人たちのたゆまぬ努力と郷土を思う心によって再び息を吹き返し、今日の活気ある街並みや江戸下町の伝統文化として受け継がれ、さらに東京スカイツリーに象徴される新たな発展をもたらしております。

本所消防署とともに、地域の安全を支え、街の再生と発展を見守ってこられたことは、私たち本所消防懇話会会員一同にとりまして、大きな誇りです。

時代の移り変わりとともに、災害の様相は大きく変化し、昨今は自然災害の激甚化もあり、地域に求められる防火・防災の役割もますます重要なものとなっております。そのような中であっても、官民が手を携え、「わが街を守る」という思いのもとに力を尽くす姿勢は、百年前も、今も、そしてこれからも変わることはありません。本所消防懇話会といたしましても、本所消防署の最良のパートナーとして、先人たちが守り育ててきた安全・安心の灯を絶やすことなく、より確かなものとして次の世代へ繋いでゆく決意です。

結びに、本所消防署のますますのご発展と、署員の皆様のご健勝、ならびに地域の皆様が安心して暮らせる日々が末永く続きますことを心より祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝辞 鈴木 明弘（本所防火管理研究会会長） 1/2



本所消防署が創設100周年という大きな節目を迎えられますことを、心よりお祝い申し上げます。また、長年にわたり地域住民の生命、身体、そして財産を守るため、昼夜を問わず献身的に職務を遂行されている消防職員並びに消防関係者の皆様に、深く敬意と感謝を申し上げます。

墨田区は、古くからのづくりの文化と下町の人情が息づくまちとして発展してまいりました。一方で、木造住宅が密集する地域も多く、幾度となく火災の脅威に直面してきた歴史があります。とりわけ、関東大震災や戦災などの大きな災害は、この地域に深い傷跡を残しました。しかし、そのたびに人々は力を合わせ、防火意識を高めながら復興を遂げ、今日の安全なまちづくりへと歩みを進めてきました。

その歴史を支えてこられたのが、本所消防署をはじめとする消防行政と、地域住民、事業所、各種団体が一体となった防火・防災活動です。防火は、消防だけが担うものではなく、地域に暮らす一人ひとりが「自分たちのまちは自分たちで守る」という意識を持ち、日頃から備えることで大きな力となります。

私たち防火管理研究会も、事業所における防火管理体制の充実と、防火管理者相互の知識・技術の向上を目的として活動を続けてまいりました。社会環境の変化に伴い、建物の高層化・複雑化、多様な働き方の普及など、防火管理を取り巻く環境も大きく変化しています。さらに近年は、地震や風水害などの自然災害への対応も含めた総合的な防災対策が求められており、防火管理者の果たす役割はますます重要になっています。

祝辞 鈴木 明弘（本所防火管理研究会会長） 2/2

100年という歴史は、先人たちが積み重ねてこられた努力と信頼の証です。その貴重な歩みを次の世代へ確実につないでいくためにも、私たちは本所消防署との連携をより一層深め、防火・防災意識の普及啓発と地域の安全文化の醸成に努めてまいります。

本所消防署の輝かしい100周年を契機として、地域、事業所、行政がこれまで以上に手を携え、「火災のない、安全で安心して暮らせるまち墨田」の実現を目指し、未来へ向けて新たな一步を踏み出すことをお誓い申し上げます。

結びに、本所消防署のさらなるご発展と、消防職員・消防団員をはじめ関係各位のご健勝、ご活躍を心より祈念申し上げ、100周年のお祝いの言葉といたします

祝辞 老田 勝（本所災害防止会会長） 1/2



本所消防署が開署100周年という大きな節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。また、この一世紀にわたり地域住民の生命と財産を守り続けてこられた歴代署員の皆様、消防団員の皆様、そして消防行政を支えてこられたすべての関係者の皆様に、深く敬意と感謝を申し上げます。

本所の街は、その成り立ちからして火災と深い関わりを持つ街です。明暦三年（1657年）の大火、いわゆる振袖火事は江戸の大半を焼き尽くし、多くの尊い命を奪いました。この未曾有の災害を教訓として防火都市計画が進められ、隅田川東岸の本所地域の開発が本格化したとされています。私たちが暮らし、働くこの街は、大火からの復興の中で生まれ育った街でもあります。

しかしその後も、本所は幾度となく火の脅威に見舞われました。関東大震災では、本所被服廠跡において発生した火災旋風により多くの避難者が犠牲となりました。また昭和20年の東京大空襲では、無数の焼夷弾によって街は焦土と化しました。本所の歴史は、火災との闘いの歴史であり、そのたびに人々が力を合わせて立ち上がり、復興を遂げてきた歴史でもあります。

本所消防署は、その関東大震災からの復興が進む大正15年（1926年）に開署されました。以来100年、戦災からの復興、高度経済成長、そして時代とともに変化する地域社会を見守りながら、防災の最前線に立ち続けてこられました。その歩みは、本所の街の歩みそのものと言っても過言ではありません。

時代の変化とともに、街の姿も火災の様相も大きく変わりました。かつて工場や倉庫が立ち並んでいた地域には住宅やマンションが増え、火災原因もたばこの不始末などから電気機器や配線に起因するものへと変化しています。

祝辞 老田 勝（本所災害防止会会長） 2/2

また、現代の消防行政においては、救急活動の重要性がますます高まっています。高齢化の進展や生活環境の変化に伴い、救急出場件数は増加を続けており、多くの住民にとって消防署との最も身近な接点は救急車かもしれません。病気やけが、突然の体調不良など、一刻を争う現場へ昼夜を問わず駆けつける救急隊員の皆様の活動は、多くの命を支え、救ってきました。

火災や災害は発生しないことが何よりですが、救急活動は日々の暮らしの中で絶え間なく必要とされています。消防署は火災から街を守るだけでなく、救急活動を通じて命をつなぎ、人々の暮らしに安心を与える存在として、その役割を大きく広げています。100年前には想像できなかった社会環境の変化に対応しながら、地域の安全を守り続けていることに深い敬意を表したいと思います。

私も本所災害防止会の活動を通じて、本所消防署の皆様と接する機会をいただいております。その中で強く感じるのは、日々の地道な備えと訓練、地域に寄り添う姿勢、そして有事の際の迅速で的確な行動こそが、この街の安心を支えているということです。

開署100周年を心からお祝い申し上げますとともに、これまでのご尽力に深く感謝申し上げます。そして、本所消防署がこれからも地域住民の信頼に応え、この街に暮らす人々の命と生活を守り続ける存在として、次の100年へ向けて力強く歩みを重ねられることを心より祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝辞 飯沼 清（本所防火防災協会会長）



このたび、本所消防署創設100周年という記念すべき節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。長年にわたり、地域住民の生命・身体・財産を守るため、昼夜を問わず献身的にご尽力されてきた皆様のご功績に深甚なる敬意と感謝を表します。

貴消防署が築き上げてこられた信頼と実績は、地域の安全・安心の礎であり、防火防災の意識向上にも大きく寄与してこられました。私ども本所防火防災協会におきまして、貴消防署との連携を通じ、地域防災力の向上に努めてまいりましたことを誇りに感じております。

近年、災害の多様化・激甚化が進む中、消防行政の役割はますます重要性を増しております。今後とも、貴消防署が中心となり地域防災の要としてご活躍されますことを期待するとともに、私どもも引き続き協力関係を深め、安全で安心な地域社会の実現に尽力してまいります。

結びに、貴消防署のさらなるご発展と、皆様のご健勝・ご活躍を心より祈念申し上げ、100周年記念誌によせる言葉といたします。

祝辞 佐々木 好子（本所防火女性の会会長）



消防署創立100周年、誠におめでとうございます。

これまで、長い年月にわたり、地域の安全と安心を守り続けてこられた皆様のご尽力に、心より感謝と敬意を申し上げます。日々の活動の中で、私たち住民に大きな安心を届けてくださっていることに、改めて深く感謝しております。

私たち本所防火女性の会は、地域の皆さまとともに防火・防災への意識を高める活動が続けてまいりました。その歩みの中で、貴消防署からの温かいご指導とご支援をいただいておりますことに、心より御礼申し上げます。

これからも地域の皆さまと手を取り合いながら、安心して暮らせるまちづくりがさらに広がっていくことを願っております。私たちも微力ながら、その一助となれるよう努めてまいります。

結びに、貴消防署のさらなるご発展と、皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げ、記念誌によせる言葉といたします。

祝辞 伊藤 光政（本所消防少年団長）



このたびは、貴消防署が創立１００周年という輝かしい節目を迎えられましたことを、本所消防少年団一同、心よりお祝い申し上げます。

長きにわたり、地域の安全と安心を守り続けてこられた皆様のご尽力に、深い敬意と感謝の念を抱いております。日々の厳しい訓練と献身的な活動が、私たちの暮らしを支えてくださっていることを、私たちは学び、実感しています。

私たち本所消防少年団は、皆様の姿を目標とし、防火・防災の大切さを学びながら、将来地域に貢献できる人となることを目指して活動しています。消防署の皆さまからご指導いただく一つ一つの経験が、私たちの成長の糧となっています。

これからも、地域の安全を守る灯として、ますますのご発展とご活躍をお祈り申し上げますとともに、私たちもその一員として、防火・防災の意識を広めていけるよう努めてまいります。

結びに、貴消防署のさらなるご繁栄と、隊員の皆さまのご健勝・ご活躍を心よりお祈り申し上げ、１００周年記念誌によせる言葉といたします。

祝辞 中野 孝雄（第七消防方面本部長）



本所消防署が開署百周年の佳節を迎えられたことを、心よりお慶び申し上げます。これも日頃より第七消防方面（墨田区、江東区、葛飾区及び江戸川区）の消防行政に対し、多大なるご理解とご協力を賜っております墨田区をはじめ、関係機関、消防協働団体、そして地域の皆様方のお陰であり、深く感謝申し上げます。

本所消防署が管轄する墨田区南部は、東京スカイツリーに代表される大規模集客施設や、両国国技館といった伝統と文化の拠点、さらには賑わいあふれる繁華街と情緒豊かな住宅地が共存し、世界中から多くの人々が訪れる躍動感に満ちています。この多種多様な都市環境の「今」を守り抜くことは、極めて重要な責務であり、日々その最前線で真摯に活動する署員一人一人の姿を、同じ消防の道を歩む者として頼もしく、誇らしく思う次第です。

顧みれば、この地は関東大震災と東京大空襲という未曾有の災禍に見舞われながら、そのたびに力強く復興を遂げてきた歴史を持ちます。その先人たちの不屈の精神は、今、地域を愛し、技術を磨き続ける職員たちのひたむきな職務遂行の中に、確かな形で受け継がれています。

第七消防方面本部といたしましても、本所消防署の最も近い理解者であり、支え合うパートナーとして、現場の課題に真摯に向き合い、安全・安心の確保に向けて歩みを共にしていく決意です。複雑化する都市災害に対して万全の備えを講じ、地域の皆様が将来にわたって安心して暮らし続けられるよう、緊密な連携のもとで全力を尽くしてまいります。

結びに、本所消防署の今後益々の発展と、地域の皆様方のさらなるご健勝・ご多幸を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝辞 関口 辰三郎（第36代本所消防署長） 1/3



私は、平成11年4月から同12年11月末日の間、所属長として在籍いたしました。その間特筆する事象もなく勤めることができましたのは、消防団、消防関係団体並びに地域の皆様のご支援ご協力によるものと、改めて感謝申し上げます。

赴任翌5月、本所災害防止会創設50周年式典が開催され、お招きをいただいた際に会員皆様及び列席した消防関係団体会長さんから、過去の水災被害、関東大震災での建物倒壊や点から面に拡大した大火災について聞いたこと、戦災で壊滅的甚大な被害を受けた体験など貴重なお話を伺うことができました。

管内の過去と現在の状況を知るために、社寺、史跡、博物館、展示館などを巡り歩いて見聞いたしました。まちは碁盤の目に区画され、多様な産業があり、錦糸町・両国駅及び墨田区役所周辺は高層建物が立ち並び、発展し活況ある町になっていました。これまでの努力に対し感謝し、安全で安心して住めるまちであるよう努めなければと思いました。後に3月10日・9月1日の東京都慰霊堂での大法要に参列し思いを更に強く持ちました。

お祭りについて、幾つかの町内会は、お神輿を繰り出し盛大に執り行われ、沿道は担ぐ人見る人で賑わい、祭り一色となっていました。他にも墨堤や公園の桜まつり、吉良祭・元禄市などにも多くの人出がありました。子供の頃のお祭りを思い出し心が弾みました。

お祭りは、伝統を引き継ぎ、終了まで力を合わせて執り行うことから、心をついに結束し一体感を強くした絆を育んでいると思いました。



祝辞 関口 辰三郎（第36代本所消防署長） 2/3



地域の皆様は、火災予防運動、消防防災訓練など積極的に参加し、更には、町会独自の手作り看板で火災予防を訴える「火災を出さない町宣言」、「防火100年の計宣言の町」の看板を通りに掲出している町会もあり、地域全体が積極的に安全なまちづくりを推進していることに心強く思いました。

本所消防団は、平成12年東京都消防団操法大会に、第七消防方面代表として出場するため、生業の貴重な時間を割いて連夜操法訓練に励んでいました。ある時の訓練終了挨拶に際し、仕事の都合で帰宅を急いでいる方もいるのではと思い、「挨拶は短く友情は長く、と言われます。本日はご多忙のなかありがとうございました、以上です。」と申し上げました。一瞬ざわついた後に大きな拍手でした。教訓としています。消防団員皆様は、地域の防災リーダーとして活躍し、常に消防署と一体となって災害・警戒並びに火災予防活動にご協力をいただきありがたく思いました。

消防少年団は、毎年相撲部屋の協力を得て、餅つき大会を行っていました。大きな体で優しく気さくに接し、団員の手を取っての餅つきに大喜びでした。私はお相撲さんと餅つきをするのは初めての体験でした。団員も私も貴重な体験を忘れることはありません。

平成12年4月PA連携活動を開始した当初は、街ゆく人々は怪訝な顔でみていました。救急車が到着した近隣の方は消防車も来たのでびっくりしたなどと言われました。そのようなことから消防団や町の方々に、救命率の向上を図るための施策であることを説明したことを覚えています。

祝辞 関口 辰三郎（第36代本所消防署長） 3/3

他に、大横川親水公園でラジオ体操をして知り合いを得たこと。街歩きで管内の歴史と文化や産業と製品など、多くのことを知ることができました

私の住むまちの高台からスカイツリーが見えます。管内の皆様に温かく親切にしてくださいましたことが、心に深くしみ込んで懐かしく思い出します。ありがとうございました。

結びに 地域の益々のご隆盛と、消防団、消防関係団体並びに管内皆様のご健康ご多幸を衷心よりお祈り申し上げます。 署員にあっては、管内皆様の期待に応えられるよう、一丸となって精進することを期待します。



関口辰三郎

祝辞 秋山 恵（第37代本所消防署長） 1/3



このたび、本所消防署が開署100周年の佳日を迎えたとのこと、日頃よりお世話になっております地域の方々と慶びを共にしたいと思います。また、本所消防署の永い歴史の一端なりとも担うことができたことは誠に光栄の至りに存じます。

私が消防署長として勤務しましたのは、平成12年（2000年）12月1日から翌年11月30日までの1年間でした。本所消防署が属する東京消防庁第七方面での勤務は初めてでしたので、本所地域は東京都のいわゆる下町といった認識のみで赴任しましたが、管内を巡り地元の方々や消防団員そして事業所の皆様のお話を伺うにつれて、江戸時代の明暦3年（1657年）に起きた「明暦の大火」以来の深い歴史と伝統溢れる品格の高い地域だと、あらためて気づくこととなりました。そこで、江戸時代の本所周辺の古地図（コピー）を買い求め、消防署の事務室に掲示するなどして、消防署員にも本所の歴史や地域の方々の気質などを共有してもらえよう努めたものでした。

在任期間は極めて短期間であり、幸いに大きな災害に遭遇することなく任務を終え、総務省消防庁・消防大学校副校長の職へと転出しましたが、地域の方々、事業所の皆様そして消防団員各位には本当にお世話になり、火災予防運動、防災訓練、年末年始の警戒活動など、様々な消防・防災行事にもご支援、ご協力をいただきました。そうした中、今でも私の記憶に残る一つの出来事がありましたので記しておきたいと思います。

本所消防署管内にある国技館には、正月、五月そして九月場所の開催中、大勢の観客が相撲観戦に訪れることから、消防署として不測の事態に備えるため、連日消防特別警戒を行っておりました。日本相撲協会とはそうした日頃のつながりもあったことから、幕内力士の引退に際しては、わざわざ消防署へも挨拶にお越しいただくなど、力士の方々と消防署員も親しく言葉を交わすことができました。

祝辞 秋山 恵（第37代本所消防署長） 2/3

平成12年（2000年）7月8日、突然、伊豆諸島の「三宅島」が噴火しました。その後も噴火が続いたため、9月1日には全島民の島外避難が決定され、在島していた約4,000人の人々が避難せざるを得なくなり、墨田区内（向島消防署管内）でも高齢者を含む方々が避難生活を送ることとなりました。そのような折、本所消防少年団が12月23日に署内で「防火餅つき大会」を行う計画を立てていたことから、避難されていた島民の方々をこの行事にご案内することとし、消防署のマイクロバスにて署へお迎えしました。

大会当日には、当時の「東関部屋」のご協力を得て、東関親方（元・関脇高見山関）をはじめ横綱曙関や同部屋の若い力士の皆様が来署され、消防少年団の子供たちによる餅つきのお手伝いをさせていただきました。また、消防関係団体や地元の皆様には準備段階からのご尽力をはじめ、当日は私の妻も手伝いの一人に加えていただき、大勢の方々のお力添えを賜りました。いよいよ、署前にて曙関による餅つきが始まったところ杵が突然折れてしまい、三宅島の皆様やその場にいた人たちが驚きの声を上げるとともに一同大爆笑となりました。この日、島民の皆様にとっては普段なかなか触れる機会がない力士の姿を目の前にし、消防少年団の子供たちや力士によるつきたての餅を味わいながら、収束がみえない噴火活動に不安が募る中での不慣れな避難生活をしばし忘れ、本当に限られた時間ではありましたが笑顔を取り戻していただくことができました。東関親方にはたびたび消防行政にご協力いただいたこと、あらためて感謝の意を表したいと思います。



祝辞 秋山 恵（第37代本所消防署長） 3/3

先ほど申し上げました通り、私の署長在任期間はわずか1年間でしたが、正月の「隅田川七福神めぐり」をはじめ、春の「墨堤さくらまつり」や「早慶レガッタ大会」、夏の「隅田川花火大会」などなど、本所の古き良き歴史と文化に触れるとともに、地域の皆様、各事業所の皆様の絶大なご支援、ご協力をいただきながら、本所地域の消防・防災業務に携わることができました。今思い返しますと、本所消防署在任期間は私の消防人生37年間のうちでも貴重な一頁となったものであり、本当に幸いな時を過ごすことができたものと、あらためて感慨にひたっております。

これまで、署長在任中の思い出の一端を述べさせていただきましたが、今後とも地域の皆様方の更なるお力添えを賜りつつ、本所消防署が輝かしい歴史を積み重ね、本所地域の一層の安寧が守られますよう心より祈念申し上げ、本所消防署開署100周年に寄せての言葉とさせていただきます。

第37代本所消防署長

元・東京消防庁理事兼総務部長 秋山 恵

祝辞 緑川 元康（第38代本所消防署長） 1/4



本所消防署が開署から100年の節目を迎えられること本当におめでとうございます。私は署長として平成13年（2001年）12月から平成16年（2004年）9月までの2年10か月勤務させていただきました。この間、幸い、大地震や台風等の災害、大事故等も無く、火災も少なく比較的平穏な2年10か月でした。

何とか無事過ごさせていただいたのはひとえに消防団、協働団体をはじめとした地域の皆様の献身的な協力と努力のお蔭と改めて感じている次第です。本当にありがとうございました。

平成16年（2004年）9月30日に本所消防署を最後に東京消防庁を退職してから、あっという間に21年あまりが過ぎました。

当時お世話になった方々、いつも穏やかな笑顔の関根懇話会長、ゴルフ大好きだった鈴木災害防止会長、小堺社長の歌う歌は「チャンピオン」、老田さんの歌は「ろくなもんじゃねえ」だったかな？（違っていたらごめんなさい）、当時の様子が今でも目に浮かびます。防火協会の池川さん、婦人部の金谷さん、優しい笑顔も思い出されます。

消防団の皆さんには、櫻井団長、林団長のもと、災害現場はもとより多くの警戒にも多くの団員の方が出動し活躍していただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。

歴史のある本所管内であり、毎年、国技館の大相撲、隅田川花火大会、牛島神社の例大祭、早慶レガッタ、隅田川の花見等恒例行事があり、特別警戒が行われました。中でも平成14年（2002年）は亀戸（4年に1回）・天祖・牛島神社（5年に1回）の大祭が20年に1回のダブリ大祭となり、町は大賑わいでした。

いずれの行事も何事もなく無事終了したこと、いまさらながらほっとしています。懸案だった国技館の升席等での喫煙の禁止については北の湖理事長にお願いし、検討が進み、私の退職後ですが平成17年（2005年）の1月場所から全席禁煙となりました。

祝辞 緑川 元康（第38代本所消防署長） 2/4



平成14年（2004年）の秋の火災予防運動では、一日消防署長として、白血病を克服して活躍中だったタレントの吉井 怜さんをお迎えし東京都江戸東京博物館で消防演習を行いました。

大勢の見学者やマスコミも多く、緊張した演習でした。

本所救急隊と東駒形救急隊は、毎年4000件前後の出動、連日大忙しの毎日でした。多忙な中でも、多くの方に応急手当の普及促進にも努めていました。火災や災害現場での積極、果敢な警防隊の活動も思い浮かびます。いずれの隊もその功績が認められ、消防総監賞をはじめ多くの賞を授与されたことが思い出されます。

平成15年（2003年）本所消防署では予防課員総出で、平成13年（2001年）の9月1日に発生し、44名の犠牲者をだした歌舞伎町火災を繰り返してはならないと、予防課員総出でJR錦糸町駅周辺の雑居ビルを対象に一斉査察を実施したことが、翌日の朝刊に大きく報道されました。

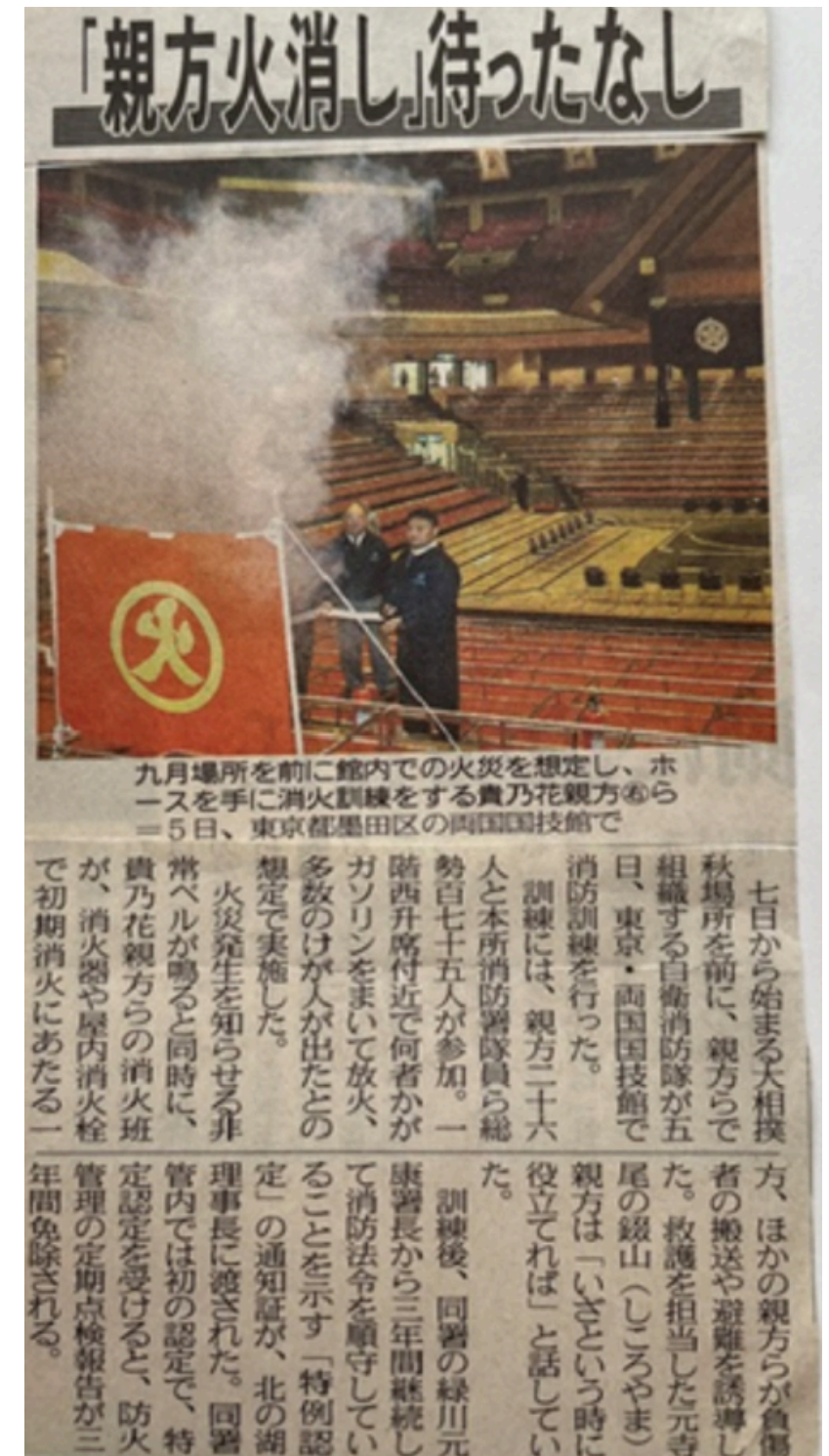


祝辞 緑川 元康（第38代本所消防署長） 3/4

歌舞伎町ビル火災、私は当時東京消防庁の第2消防方面本部で副本部長として勤務していました。第2消防方面本部からは方面本部所属のハイパーレスキュー隊が出動し悲惨な報告を受けました。44名の多くの若い命が奪われました。昭和57年（1982年）私が本部の査察課に勤務していた時発生したホテルニュージャパン火災（死者33名）が思い出されました。何故あの教訓が生かされなく、繰り返されるのか？事故の未然防止のための予防業務は難しい・・・今でも悔しい思いでいっぱいです。錦糸町や両国の雑居ビルの階段に物が置かれて避難の邪魔になっていないか？火災報知器やスプリンクラーの老朽化が進んでいると思われます。消防用設備の点検は今後ますます重要になると思います。

元横綱の曙関や貴乃花関をはじめとして寺尾関、貴闘力関等、多くの引退力士の訪問も受けました。署長室のソファが小さく見えたのが印象的でした。

貴乃花関が引退後、国技館の自衛消防訓練で隊長として活躍した姿も目に浮かびます。



祝辞 緑川 元康（第38代本所消防署長） 4/4



平成16年には9月1日の防災の日の前に本所災害防止会と本所防火管理研究会の2団体が合同で2年をかけて作成した本所管内の防災マップが完成しました。

あれから21年、管内は、再開発も進み大きく変化し今後も益々発展し変化していくことでしょう。私が東京消防を拝命した昭和48年ごろは、関東の大地震の発生予測として69年周期説を元に、震災対策が進められてきましたが、幸い在職中に大災害が発生する地震は発生しませんでした。しかし、日本ではどこかで毎年のように大きな地震が発生し甚大な被害をもたらしています。東日本大震災の時の東京中の混乱。私も当日は虎ノ門の事務所に泊まり、翌日やっとタクシーを確保、つくばの自宅へ戻りました。

私は本所消防署在任期間の平成15年（2003年）と平成16年（2004年）の2回、国技館で開催された第19回と第20回の国技館「5000人の第9コンサート」に参加し、災害に負けず歓喜の歌であふれる街になるよう精いっぱい歌わせていただきました。

本所消防署開署100周年を契機として、地域の繋がりがより強く強固なものとなり、安心、安全な街として、ますます発展することを心から祈念いたします。

私は今年3月で81歳になりました。見た目だけは元気そうな、2026年6月、茨城県内の某所での最近の姿です。



祝辞 小田桐 行雄（第40代本所消防署長） 1/2



本所消防署開署100周年の記念すべき佳節を迎えられ心からお祝い申し上げます。
私の消防人生は、本所（拝命）に始まり本所（退職）に終焉した38年間でした。昭和43年2月29日に本所消防署に拝命したのが、消防の第一歩でした。当時は現在の東駒形出張所が本署で敷地が狭く、車庫は間隔がほぼなく車両の出し入れは厳しい状況だという記憶があります。そして望楼勤務もありました。1時間交代の勤務ですが、冬期の深夜は冷え込みが厳しく相当つらい思いをしたものでした（今では望楼は死語かな）。そういう中で小隊員、消防車機関員そして指揮車機関員など勤めさせていただきました。消防実務の基本を叩き込まれたのもこのころだと思います。

それから三十数年経って、平成18年10月に拝命署に署長として赴任することになりました。拝命署の署長になるとは夢にも思っていなかったので私にとっては青天の霹靂という思いでした。赴任したその本署は横川四丁目に移っていて敷地も広く防災館と一体となった大きく立派な庁舎になっており、感慨深い思いがしました。庁舎に入ると「お帰り！」と言われたような気になりました。

赴任早々、東京消防庁秋の火災予防運動の一環である消防演習を担当することになり、女性芸能人を一日消防署長に迎えて錦糸町オリナスで大々的に実施したことを記憶しています。また両国国技館では優良防火対象物の認定をしたこと、東京スカイツリー（自立式電波塔）の建設に向けて事業者の方と消防署で打合せなどもありました。その当時、これまでに類のない建築物として既存の規制法令を超えた状態で都、国との間で新たな基準を要する状況下であったという記憶があります。そして平成19年9月30日に退職することになり、消防人生を終えることになりました。

祝辞 小田桐 行雄（第40代本所消防署長） 2/2

その後、東武系の仕事に携わっていたことから退職3年後に縁あって、東京スカイツリー開業1年半前の平成22年8月に防災アドバイザーを務めることになり、その際、会社側から防火管理全般に手つかずの状態だと聞かされ、早急に対応しなければならないと思い、当署予防課へ何度か足を運び連絡調整をさせていただき、防火管理、消防計画等の段取りをつけさせていただいた事もありました。

今では、全てが懐かしい思い出として蘇っております。

消防署長在任中は、関係団体の皆様、消防団の皆様そして職員の皆様に一方ならぬご支援、ご協力、ご指導をいただいた事に改めてお礼申し上げます。

最後に、本所消防署、関係団体、消防団の皆様の益々の充実、ご発展を心から祈念してお祝いいたします。

祝辞 齋藤 和文（第42代本所消防署長） 1/2



このたび、本所消防署が開署100周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。大正15年に警視庁本所消防署として開設され、戦時を経て本所地区の防火防災安全に大きな責任を果たされ佳節を迎えられたことは、一時期を本所消防署長として勤務した私にとりましても至上の慶びであります。

私が勤務したのは2009年春からの2年間でした。墨田区は関東大震災と東京大空襲で大きな被害を受けており、隅田川と荒川に挟まれた海拔ゼロメートル地帯として度重なる洪水被害にも見舞われたことなどで地域住民の方々は非常に高い防災意識をお持ちです。このため、消防行政を進める上でいつも深い理解と大きな支援が得られていたことが思い出されます。

また、本所消防団や消防協働団体の皆様にも温かく迎えて頂きました。特に本所消防団の幹部やOBの中には、小学生の私が通った水泳教室の先生だった方、サイクリング同好会の指導者だった方もおられ、生まれも育ちも墨田区である私でしたが、地元消防署長として再びお世話になるとは思ってもいませんでした。

勤務当時、管内では東京スカイツリータウンの建設が進んでおりました。世界一の電波塔、水族館やプラネタリウムを擁する大型の商業施設が誕生間近であり、新たな観光資源の出現を街全体が待ちわびている、そのような大きな活気がありました。その最中、2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。管内では地震による大きな被害は見られませんでした。建設中のスカイツリーは耐震構造の要と言われていた心柱（中心に位置する構造上重要な部位）が完成していない段階でした。しかし、さすがは我が国の耐震技術、スカイツリーがゆっくりと揺れているのは見えましたが、大きな損傷もなく無事に竣工しています。



祝辞 齋藤 和文（第42代本所消防署長） 2/2

あれから早15年が経過し、旧緑出張所は移転改築され錦糸町出張所に、また、東駒形出張所も改築計画が進み既に仮庁舎で運用されていると聞いており、本所地区の防災拠点機能は着実に強化されております。

本所消防署には、これから更なる100年に向かい、墨田区役所、本所消防団、消防協働団体等との連携協力のもと地域防災を一層充実されることを願い、あわせて署員皆様のますますのご活躍をお祈りして祝辞といたします。

祝辞 熊澤 利久（第43代本所消防署長） 1/5



本所消防署開署 100 周年によせて ― 百分の一の歴史を紡ぐ ―

本所消防署開署 100 年、誠におめでとうございます。この長い歴史を紡いできて頂いた地元の皆様、歴代の消防署員に心から敬意を表すると共に感謝申し上げます。

私は、平成 23 年 4 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日までの一年間本所消防署に勤務させていただきました。受け継いだ襷を次の人に無事渡せた事を誇りに思っています。

この度記念誌の編纂にあたり、ありがたい機会を与えていただいたので、署の歴史の中の百分の一の期間の出来事を記録してみたいと思います。

赴任の直前、3 月 11 日に東北地方太平洋沖地震（M9.0 震度7）、3 月 12 日に長野県北部地震（M6.6 震度6強）、3 月 15 日に静岡東部地震（震度6強）が連続して発生し、停電の発生、物流の停滞、地震の被害や東京湾沿いの石油コンビナートでの火災などに続き福島原子力発電所の事故が発生して、東京も大混乱している中でした。

当時は、被災地への配慮、犠牲者への鎮魂、被災地での災害対応などのため世の中の動きが停滞して何事をなすにも自粛ムードに包まれていました。前任の小石川消防署においては 3 月 26 日に気仙沼市の火災に応援の部隊を派遣しましたが、本所消防署でも部隊を派遣していて 4 月 23 日に至って派遣を終了しました。

私は、本所消防署ってどの辺ですかと聞かれると、隅田川に沿って南は両国の国技館から北はスカイツリーまでと答えるようにしていました。あまり正確ではありませんがどなたもこれで大体のイメージはつかんでいたようです。

両国の国技館では、直近にあった大相撲・野球賭博の問題もあって 5 月の本場所が中止となり、技量審査場所として開催されましたが、通常公開として見たい人が勝手に入場して見物できるという状況のなか、まばらな見物人の中淡々と相撲の取り組みがなされていたのは異様な雰囲気でした。

祝辞 熊澤 利久（第43代本所消防署長） 2/5

1 1月になると、2 4日から4日間にわたって体操のワールドカップが行われました。国技館で体操の世界大会が行われるのは最初で最後なのではないでしょうか。開会式では、力士の化粧まわしをかたどったプラカードに国名や選手名を書いて紹介する演出に国技館ならではのアイデアと感心したものです。工夫することていろいろなことが創造されるわけですね。当時は、五輪の金メダリスト内村航平選手の実力が圧倒的で、彼の演技が終了すると、外国の選手がシュンとして戦意喪失しているのがはっきりわかり、競技の世界的大会としては、勝負にかける熱気や盛り上がりがいまひとつ欠けていたように思いました。

このころの国際大会では、警備態勢や救護態勢が、東京へのオリンピック招致の評価要素になるとのことで消防特別警戒を手厚く行ったものです。警戒員の配備、救急隊員の配置など安全対策、救護体制を敷きました。特に救急隊の配置には気を使って、大会関係者や選手からよく見える場所、すなわち演技スペースのすぐわき、審査員や選手控え場所の近くに机を確保し、救急バッグの底にアンビュランスと書いてあるので、机の上にバッグを横向きに文字が演技スペースの方に向くようにして待機していました。吊り輪の演技が終わった選手の頬から流血があり（吊り輪の帯が顔に当たったらしい）衆人環視の中でただちに対応することができました。

翌年2月には第九の演奏会がありました。「一万人の第九」ということで、歌い手五千人、聴衆五千人という大規模なものでしたが、私が知っているフレーズに至るまで約5 0分を要して何か別世界に居るような感覚を覚えました。幸い事故もなく消防特別警戒は無事に終了することができました。

師走の両国地区では忠臣蔵のイベントが開催されたり、1 4日には本所松坂町公園（旧吉良邸跡地の一部）で墨田区長さん以下地元のお歴々多数が参加して義士祭が執り行われました。首洗いの井戸というのが残っていて、義士たちはここで打ち取った首を清めて泉岳寺まで行進したそうです。義士の地元の人たちはこの日にここから泉岳寺まで歩いて当時を偲ぶそうです。吉良公の領地の末裔の人たちはここで慰霊をするそうで、両者は敵対関係にあったわけですが近年和解して、この日は共に参加していたと聞きました。

祝辞 熊澤 利久（第43代本所消防署長） 3/5

スカイツリー本体には地震の被害はなかったようですが、物流の停滞などで工事は遅れ始めていたようです。特に、メインの高速のエレベーターが茨城県の日立の工場が被害をうけて納入が大幅に遅れるというので、完成の目途が立たなくなっていました。この工事を見学に訪れる人のために、地元の飲食店ではスカイツリー天井なるものが考案されて売り出され評判になりました。エビの天ぷらが逆立ちしていて、尻尾が天空を突くような迫力満点の盛り付けです。スカイツリーのように見えたかどうかは見る人次第ということですね。

スカイツリーは経験のない高さの工作物ですからいろいろなことがありました。中でも、早朝に両国の駅で電車を待つ人が、第一展望台のガラスに映る朝日を見て火災と思って通報してくるのです。まだこの辺では日の出を感じない時間帯でのことですが、おそらく房総半島沖や大島あたりの日の出が、高さ450メートルにある展望台のガラスに映えるのでしょう。オレンジ色の炎がメラメラと燃えているように見えてしまうのです。火災ではないと分かったうえで見ればけっこう美しい光景なんですけどね。ただスカイツリーでは本当の火災が何度かありました。溶接の火花が積んであったウレタンに燃え移り、黒煙噴出中なんて工事現場特有の火災もありましたが、万全の体制を取っていたので何とか大事に至らずに済みました。

翌年1月には、第7方面あげての応援を頂きながら消防の使用検査を実施して一段落しました。天皇陛下（現上皇陛下）が第二展望台の天空回廊をご視察なされるまえに安全を確保することができましたことはこの上もない喜びでした。完成後にも、強風時の騒音問題や、積雪時の周辺への落雪危険など問題も出て来たようですが適切に対応して頂いているのではないのでしょうか。

先般、エレベーターに長時間閉じ込められる事故がありましたが無事救助されましたね。事故は防げなかったけれども救助できる対策は整っていたわけですね。

平成23年4月頃の墨田区内では、毎年7月に行われる恒例の隅田川の花火大会ができるかどうかが大問題になっていました。東日本大震災後の社会の停滞、自粛ムードの中、お祭り気分で賑やかな催しはいかなものかという精神的な抑制が働いていたのと、大会の開催に必要な資機材が準備できるのか、また、大会の準備運営、警備、警戒要員が出せるのかなど見通しが全くたっていなかったからです。

祝辞 熊澤 利久（第43代本所消防署長） 4/5

対岸の台東区でも一大イベントの三社祭における神輿の公道渡御が全て中止となり、境内で神事のみ行うことになっていたようです。ただ翌平成24年は三社祭が始まって700年を記念して「船渡御」が行われました。これは浅草神社の三柱の神輿（一宮、二宮、三宮）三基がさくら橋から両国橋まで船で渡るものです。3月18日のことです、現地警戒本部の席から厳かで勇壮なお姿を拝することができました。この行事は私の消防生活で最後の消防特別警戒でした。

隅田川の花火大会はルーツを探ると、江戸時代の享保17年（1732）に大飢饉が発生し、多くの餓死者が出たうえ疫病まで流行したことで、8代将軍の吉宗公が犠牲になった人々の慰霊と悪疫退散を祈って、翌年「両国の川開きの花火」として打ち上げたのが起源とされているそうです。ですから隅田川の花火はもともと天災などの犠牲者の慰霊と厄払いを目的としていたことから、地元の方々から東日本大震災で甚大な被害を受けた今こそ実施すべきではないかとの機運が盛り上がるのに時間はかからなかったようです。ただ資機材等調達の現実問題があり、結局一月遅れて8月に実施されることになったのです。関東を除く全国的にはお盆の時期で犠牲となった方々には新盆にあたり、慰霊のための行事としては最も相応しい時期だったのかもしれないね。

8月27日に花火大会は実施されました。屋台の出店などお祭り気分は自粛されていましたが花火は例年通り盛大に打ち上げられました。墨田区役所屋上の警戒派遣所に行くと、打ち上げ花火がすぐ横で花開いているところを見ることができました。スカイツリー第一展望台の警戒派遣所から見ると、打ち上げ花火が遥か下のほうでパッパッと光って見えました。手に持った線香花火がパチパチするのを上から見下ろしているような感覚でした。例年と異なる状況の中で催された花火大会でしたが事故なく終了できたことは何よりも幸いでした。

江戸時代の災害の犠牲者の慰霊といえば、本所の回向院がありますね。明暦3年（1657）明暦の大火の犠牲者、10万人以上といわれますが、この火災で亡くなった犠牲者を供養するため、将軍家綱公がこの地域に土地を与え、身元の分からない人々の亡骸を手厚く葬るよう「万人塚」という墳墓を設け法要を行ったときに建てられた御堂が回向院の始まりだそうです。境内に入ると、鼠小僧次郎吉のお墓があったり、犬猫動物の供養塔があったり、大相撲発祥の地として「力塚」があったり、貴重な歴史を感じさせてもらえるお寺ですね。

祝辞 熊澤 利久（第43代本所消防署長） 5/5

隅田川の花火が終わって9月1日には、早朝6時に本所消防団が横網町の東京都慰霊堂に参集訓練で集結します。関東大震災時この地（本所被服廠跡）で亡くなった多くの犠牲者の慰霊をしたのち、この日各地域で行われる防災訓練などに赴きます。

この東京都慰霊堂では関東大震災の起こった9月1日と10万人以上の犠牲者を出した東京大空襲のあった3月10日には、毎年御皇族ご臨席のもと慰霊のための大法要が行われています。この慰霊堂には今なお5万人以上の御遺骨が安置されているそうです。

本所消防署の管内は、江戸時代からの災害の犠牲者の慰霊の地であったのと、関東大震災、東京大空襲など、震災と戦災の犠牲者の慰霊と共に復興の街づくりの歴史の上に成り立っているのだと思いました。

この一年の間に経験したこと、学んだこと、発見したこと、また、消防団を初め地元の皆様に助けて頂いたこと、本所消防署の職員と汗や涙（うれし涙も含みます）を流したこと、記録しておきたいことはまだまだ沢山ありますが、消防生活最後の勤務地としてこのような歴史や伝統文化の奥行き深い土地で過ごせたことは私にとって何ものにも変えがたい宝物になっています。

最後に、本所消防署の今後益々の発展をお祈り申し上げますと共に次の100年に向け、署員の皆さんが大いに発奮して下さるよう期待し、また管内の皆様の安心と安全が益々向上して、この地域が更なる発展を遂げていきますようお祈り申し上げます次第であります。

祝辞 小暮 秀嗣（第44代本所消防署長）



本所消防署開所100周年、おめでとうございます。墨田の地域に根差してそれぞれの時代の職員が安寧を守り続けてきたこと、お疲れ様です。

小生が本所に赴任したのは、2012年（平成24年）4月でした。その時は5月にスカイツリーが開業する時でありました。あのスカイツリーの開業年に赴任できたことは、時の運でしょう。イメージキャラクターのソラカラちゃんを一日消防署長にして消防演習を実施できたこと、小生には印象深いものでした。良い思い出でいっぱいです。

また、玄関にあるミニ消防車も小生の時に作成したもので、消防署見学の子供たちがミニ消防車で遊んでいる風景を思い出すと、心が癒されます。

本所署の今後の活躍に期待します。



祝辞 宮野 収（第48代本所消防署長）



このたび本所消防署が開署100周年という大きな節目を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。本所消防署は大正15年の開設以来、地域の安全と安心を守るという使命のもと、多くの先人が、あらゆる災害から地域の皆様の身体、生命及び財産を護り続けてこられました。その歴史の重みを思うと、深い敬意を抱きます。

私の任期は元号が平成から令和に代わった短い期間でしたが、在任していた頃を振り返ると、災害の多様化や社会環境の変化、救急需要の増大、新型コロナウイルス感染症の世界的流行等に直面しながらも、職員一人ひとりが高い使命感を持ち、日々の訓練と災害対応及び各種業務に真摯に取り組んでいた姿を思い出します。そして、その使命を果たすことができたのは、地域の皆様、本所消防協働団体等の関係機関、そして本所消防団の皆様からの温かいご支援によるものと確信しています。

さて、私にとって特別な縁について触れさせていただきます。消防において警察との連携は欠かすことのできない重要な要素ですが、私が消防署長として在任した際の本所警察署長が、高校時代の同級生であり、若い頃からよく知る間柄でした。二人そろって「地域の安全・安心を守る職」に就き、さらに署長として同じ地域を支える立場になるとは、当時の私たちは想像もしていませんでした。現役時代、消防と警察が協力しなければならない場面は数多くありましたが、長年の友としての信頼関係が、現場での意思疎通や判断、そして地域の皆様の安全・安心にも良い影響を与えていたものと感じています。

100年の歴史は、先人たちの努力と地域の皆様の支えによって築かれたものです。そして次の100年は、その伝統と誇りを胸に、現役の職員の皆さんが新たな時代の消防をつくり上げていく番です。地域に寄り添い、様々な変化に対応し、誰からも信頼され愛される消防を目指して歩いていかれることを、心から期待しております。

結びに、これまで本所消防署を支えてくださったすべての皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後のさらなるご発展と、現役職員の皆様のご健勝を心より祈念いたします。

祝辞 和田 浩知（第49代本所消防署長） 1/2



歴代署員の皆様が、長年にわたり地域の安全・安心を守り続けてこられたご尽力に、心より深い敬意を表します。また、数々の災害活動を共に乗り越えてきた消防団の皆様、そして日頃から署を支えてくださった消防協働団体の皆様に対し、改めて深く感謝申し上げます。

本所管内は、関東大震災や東京大空襲といった大きな災害を経験してきた地域であり、住民の皆様の間には防災意識と助け合いの精神が深く根付いております。消防行政への理解も非常に高く、緑出張所の移転（現・錦糸町出張所）の際にも、地域の皆様から多くのご理解とご協力をいただきました。私自身、着任時より、被服廠跡地のような悲劇を決して繰り返してはならないとの強い使命感を胸に、職務にあたってまいりました。

私が勤務していた2020年からの二年間は、新型コロナウイルス感染症への対応という、これまで経験したことのない困難な課題に直面していた時期でもありました。救急要請の増大により現場は逼迫し、連続出場が続く救急隊員は疲労を重ね、到着や治療を不安の中で待つ傷病者に胸を痛める日々が続きました。

さらに、現場で活動する署員の感染リスクに加え、その家族への感染も懸念され、署内で感染が広がり業務継続に支障をきたすことのないよう、日々、緊張感の中で過ごしていたことを今も鮮明に記憶しております。

一方で、開催された東京オリンピックでは、両国国技館でのボクシング競技の警戒にあたりました。無観客開催ではありましたが、世界に発信される重要な舞台であることに変わりはなく、署員は火災予防上の検査や災害・救急事案を想定した訓練に真摯に取り組み、それぞれの持ち場で責任を果たしてくれました。

祝辞 和田 浩知（第49代本所消防署長） 2/2



こうした状況下でも、署員一人ひとりが使命感を持ち、組織が一丸となってコロナ禍への対応と本来の職責を全うしてくれたことは、署長として大きな誇りであり、決して忘れることのできない思い出です。

感染を避けるため単独で行動することも多く、少し寂しさを感じることもありましたが、それは署員も同じ思いだったのかもしれません。

また、コロナ禍においては、消防団や地域の皆様との交流の機会も限られておりましたが、そのような中でも、消防の苦勞に深い理解を示してくださった地域事業所の会長様より救急車をご寄贈いただくなど、心温まる出来事もございました。

現在は、大和証券グループの一員として勤務しておりますが、本所での経験は今も私の支えであり、皆様への感謝の思いは変わることがありません。

東京湾を隔て、毎夜、遠くに灯るスカイツリーを目にし、本所で過ごした日々を思い返しながら、署員の皆様がこれからも消防の誇りを胸に地域の安全を守り続けられることを、心よりお祈りしております。

大和証券ファシリティーズ株式会社 担当部長 和田浩知

祝辞 瀬尾 弘孝（第50代本所消防署長）



本所消防署がここに創立百周年という歴史的節目を迎えられましたことは、誠に慶びにたえません。

この栄えある日を共に迎えることができたのも、ひとえに職務に精励されている署員一人ひとりのご功績並びに先人諸先輩方のご尽力、加えて平素より深いご理解をいただきありがとうございます地域の皆様のご協力の賜物であり、衷心より敬意と感謝を申し上げます。

本所消防署管内は、古くから人々の営みが息づく地域であると同時に、関東大震災において最大の被災地の一つとなった歴史を有しています。私自身、在職期間中に関東大震災百年という節目を迎え、その本所の地において勤務できたことは、筆舌に尽くしがたい思い出であり、深い感慨として胸に刻まれています。この経験の重みを生かし、先人たちが刻まれた教訓を未来に継承していく責務を改めて強く認識しました。

百年という長い歳月は、社会や災害の様相を一変させました。気候変動による大規模な自然災害、複雑化する都市災害、高齢社会等への救急対応など、消防行政に求められる役割はますます高度化・多様化している現状にあります。しかし、どのような時代であっても消防は原点を見失うことなく、先人たちの教えを引き継ぎながら、消防団、地域の皆様、自主防災組織並びに関係機関との連携を一層強化して、「地域の安全安心」を第一義とする揺るぎのない防火防災体制を構築し、次の百年に向かって鋭意邁進していただきたいと思います。心より応援申し上げます。

結びに、在任中本所消防署の発展にご尽力いただいたすべての方々に改めて深甚なる敬意と感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げ、寄稿の言葉といたします。

祝辞 葛城 歳男（第51代本所消防署長）



本所消防署が一世紀の長きにわたり、本所にお住いの皆様、働かれる皆様、訪れる皆様とともに、安全で安心して暮らせるまち「本所」を築き上げてこられたことに、心よりお祝いを申し上げます。

本所は、大火、大震災、戦禍で甚大な被害を受けた地域であり、その歴史の中で地域が強い絆で結ばれ、新たな伝統、文化を築き上げてこられたと実感いたします。江戸の伝統とスカイツリーをはじめとする新たな文化が融合するまちで、私が署長を務めさせて頂いた期間、大きな災害なく過ごすことができました。

私の大きな思い出は、各種消防業務や消防活動で優秀な署として多数の表彰を受けたこと、危険な消防業務のなかでプロフェッショナルとしての安全を追求し各種事故等がなかったことです。これは本所の地域の皆様と消防署職員の皆様の消防への熱い思いや温かいご支援ご協力の賜物であり、深く感謝を申し上げます。

新たな時代はデジタル技術が牽引し、消防も革新されることを期待いたします。一方で、人工知能などでは代替できない、人のつながりや絆は更に深化する必要があると実感します。短い期間ではありましたが、本所の多くの皆様と懇親させていただき、素晴らしい時間を過ごさせていただきました。人情、粋といった江戸文化の一端を体感できたことは私の一生の財産です。

次の100年、多様な災害が危惧され、更なる備えが必要となります。次世代を担う子供たちの笑顔あふれる本所が、輝かしい伝統に育まれ、安全で安心して暮らせるまちを極められますことを確信しております。